新村出著

「言語学概論」

藤原与一

私は、新村出先生の「言語学概論」をあげる。これは、旧の岩波講座『日本文学』の中の一冊である。昭和八年四月二十日に発行された。

当時の愛読書といえば、私には、右の講座全体が愛読書であった。講座が完了すると、私は、多数の全冊を、自分の考案によって分類し排列した。そのように体系化されたものを、毎月配本用であった紙函に順次おさめ、各函ごとに、その背へ、内容書冊名列記の紙をはった。なかなかに、てまをとったしごとであったが、それをするのが、ずいぶんたのしかった。

新村先生のご本（六一ページの冊子）の入れられているのは、私製、「語学㈠」という箱である。ちなみに、この函には、新村先生のをはじめとして、山田孝雄先生の「日本文法要論」、橋本進吉先生の「国語学概論　㈠㈡」、武内義雄先生の「支那文字学」、東条操先生の「方言研究の概観」、安藤正次先生の「国語音声学」、藤村作先生の「国語教育論」がおさめられている。

これらのご高著のいずれもが、今また、新しく、私のむねにせまってくる。山田先生のでは、目次の一四に、「文の種類及び文法学の極限」とある。文法学の極限、このおことばを拝しただけでも、私はピリッとさせられる。文章（連文）論までも文法学にとりこもうとしている私である。（私見の文章論は、文章構造論と文章表現論とから成る。文章表現論は文体論にまでいく。）武内先生のには、最初に「敍論」とあって、これにもハッとさせられる。

新村先生の「言語学概論」は、さきに述べた講座での第二十回配本に属するものであった。私は、予告を拝見して以来、いろいろな想像をめぐらして、ご発表の日を鶴首した。その待望には、当時の言語学界内の一話題に対する関心という事情もあった。

いよいよご本を手にした時の読書態度は、われながら緊張したものだった。

それにちがいなかったろう。こんどこれをとり出しても、やにわに私は感奮した。

最初の拝読は、昭和八年五月六日七日である。五月六日の午後十一時に拝読をはじめて、五月七日の午前九時二十分に「了」したとある。私には例のごくすくない夜読である。ほほう、徹夜したのかと、あらためてニッコリとしたしだいである。なつかしい。と同時に、新村先生老大家のご温容を思いだす。

私がはじめて本らしい本（『日本語方言文法の研究』）を出し得た時には、恩師土井忠生先生を通じて、どんな本かとのおことばがあった。つつしんで献呈した。先生の書簡

集に小名を見いだしたりしたのは、後年のことである。

そのむかし、一介の書生が、早くも先生に傾倒したのは、まことに奇ともされることであろう。

「言語学概論」の、さきに言う夜読は、諸所に赤の傍線を引いていった銘読であった。上欄とも言える個所に、多少のおぼえがきも施してある。最後の記録、読後感は、つぎのとおりである。

博学達識の新村先生の説く所悉く緊要の文字。

而も能文なる故理会容易。

綿密に一気に読破し得たる近来の良書也。

不遜なことが書いてある。だが、おおまじめだったに相違ない。

ご講述の中の二・三を引用させていただこう。八～九ページには、

たゞ紹介的直訳的でなく祖述的応用的でなく、西洋系統の言語学説の咀嚼に基いて新国語学の創立と新言語学の提唱との望ましいことは固より多言を要しない。

（中略）

少くとも一般言語学と仮想僭称されてをさまつてゐる所の西洋言語学に対立してそれを批判する任務を帯びる東洋言語学の樹立を目指したいものである。

とある。私は、〝東洋言語学の樹立〟とのおことばに、目を見はった。今、思うのに、〝仮想僭称されて……〟のところは、意外におつよい、先生のおことばとも言えようか。当時は、この表現を必要とされたのであろう。私は、一読者として、先生のご鞭撻を感じた。

二八ページには、こうある。

自己の国語を通して言語を観るのを第一義として進みつゝも、他国語の正しい認識によつて、対照法と比較法とに由つて、自己の国語を見直したり判定したりしてゆくのが、国語学の向上になり、やがて言語学への接近になる。又それは言語学進歩の過程としても正当である。国語学即言語学たりしインド人やギリシヤ人の観念は、今なほ循奉してもよいと思ふ。もし現代の日本人の有つ哲学観と国語の経験的な研究の結果とが結びついて、そこから日本の新国語学を通して日本人の立てた言語学がおのづから生れるとするならば、所依の日本哲学がよしや固有のものでなくとも、欧米の言語学の日本語への適用よりも遙に勝しなものであらう。日本の国語学の基礎の上に立つた日本の言語学がおのづと生れさへすればよいと思ふ。私たちは現代の日本哲学者に期待する所が尠少でない。

方言研究に関するご提言のかずかずは、私に天与の指針ともなった。「方言こそは実際に国語が生活してゐる所の実相を言語相を示してゐるものであり、国語生活の源泉をもなすのであるから、」（一八ページ）などとある。（60・11・30）

――広島大学名誉教授――